Osaka University Knowledge Archive

Title	麻疹ワクチンのすすめ
Author(s)	上田, 重晴
Citation	makoto. 1978, 22, p. 5-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

麻疹ワクチンのすすめ

兵庫医科大学助教授
大阪大学微生物病研究所講師
上田　重晴

麻疹は今でも恐い

麻疹は古今東西を問わず誰れもが罹らずに済ませない病気とされてきた。その上、「命定め」といわれたほど重かったことはよく知られた事実であるが、近年栄養状態が良くなり、細菌の二次感染を防ぐ抗生物質の発達で死亡率も低下したために、最近の麻疹は以前ほど恐れられなくなっている。確かに厚生省の人口動態統計をみても、戦後すぐの昭和22年から26年くらいの間は年間1万ないし2万人の麻疹死亡が数えられていた（それ以前は数字がないが、もっと多かったであろう）のが、ここ10年間は300ないし500人に減っている。麻疹は軽くなったといえるかも知れない。しかし、現在では我々はこの数字を0にできる手段を持っているのである。

麻疹ワクチン

麻疹ワクチンは昭和35年に開発された。わが国では奥野阪大微研教授、米国ではノーベル賞学者のエンダース博士、ソ連ではスモロディンチェフ博士らが各国でほぼ同時に開発に成功したのであった。その後種々の改良が加えられて、現在では高度弱毒生麻しんワクチンと呼ばれる副作用の少い、免疫効果の優れたワクチンができている。

これを子供の皮下に注射すると約1週間後に熱が出る。しかし、熱発率は3割から多くても5割である。熱の高さは平均で38.5度くらい、有熱期間も1～2日であって、良性の発熱である。良性といったのは熱が出ても子供は気嫌が良く、家の中で飛び回って遊んでいる事が多いからである。発熱の他には解熱の頃に発疹がパラパラと出ることがあるが、2～3日で消退する。主な副作用はこの程度のもので、とりたてて心配するほどのこともないが、稀に熱性痙攣の起ることがある。我々はそのような体質の子供に接種するときには事前に保護者に充分説明するようにしている。ちょっとした事でトラブルが防げるからである。

麻疹の免疫は生涯免疫である。ワクチンが開発されてもう10数年になる。現在のワクチンになってからでも7～8年が経過した。この数字は長いようでもあり短いようでもある。ワクチンによる免疫が生涯免疫かどうかを時間の経過から確かめるには短いが、学問的には充分な時間が経過したといえる。自然の麻疹に罹った子供とワクチン接種を受けた子供の麻疹抗体の減り方を検べた結果、両者の間に大差のない事がわかっている。また、麻疹のように比較的潜伏期の長い場合には、抗体価が低くなった時点で再び感染を受けても、抗体の二次反応が早く発病が抑えられてしまう。このようなわけで我々はワクチンによっても生涯免疫あるいはそれに近い免疫が得られるものと思っている。

ワクチンの使い方

改めて使い方というようなサブタイトルを掲げたのは決りきった使用法の説明ではなく、もう少し大きな意味での使い方に目を向けてみたかったからである。

厚生省はようやく麻疹ワクチンを義務接種化した。従来よりは一歩前進であるが、考えてみるとおかしな義務接種である。対象を2才児のみに絞り、費用の何千円かは保護者負担である。米国ではワクチンの開発後いちはやく大々的にキャンペーンを行い麻疹の流行規模もそれ以前の10分の1くらいに小さくなったが、尚、患者が出るという事で再びキャンペーンを始めた。麻疹ワクチン接種済証明がなければ小学校への入学許可を与えないという法律が殆んどの州で成立している。その代り費用は公的医療機関では不要、私的医療機関でもわづかに5ドルで済む。

もう一つの問題は接種年令の選択である。先の人口動態統計では患者数は1才児で最も多く2才、3才と少なくなっている。死亡者数は患者数第5位の0才児がトップを占めていて、年令の上昇と共に少なくなっている。また、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という小児期の悲惨な病気が麻疹罹患後に起ることがあるが、0才時に麻疹に罹った子供の発病率が非常に高いのである。乳児の麻疹が極めて危険であるといえる。従って0才児へのワクチン接種が極めて有効であろうということになるが、残念ながら母体免疫残存の関係でワクチンが善感しない場合も多い。

それで私の提案であるが残された道は一つ、1才（米国では15カ月）以上の子供すべてを対象にワクチン接種を徹底して行うことである。そうすることによって麻疹流行の規模は小さくなり、おそらく日本のように移民の少ない島国では数年を経ずして麻疹を根絶できるであろう。麻疹ワクチンの研究では世界のトップレベルにあり、しかも経済大国の日本はこの辺りで1つ位世界に先がけて文明的な大仕事をしてもよい時期にきていると思う。これで命を救われる子供の中から将来の大物が育つかも知れない。